

## 第2章 京都大学病院構内 AF20 区の発掘調査

阪口英毅

### 1 調査の概要

調査地点は、京都大学病院構内の東南部、外来診療棟の南側にあたり、熊野神社の北約150m、聖護院門跡の西約200mに位置する（図版1-269）。ここに構内道路や防火水槽などを設営する基幹整備工事が予定されたため、隣接地点の既往の調査成果を勘案して、予定地内の発掘調査を実施した。現地調査は1999年6月14日に開始し、7月9日に終了した。調査面積は49㎡である。

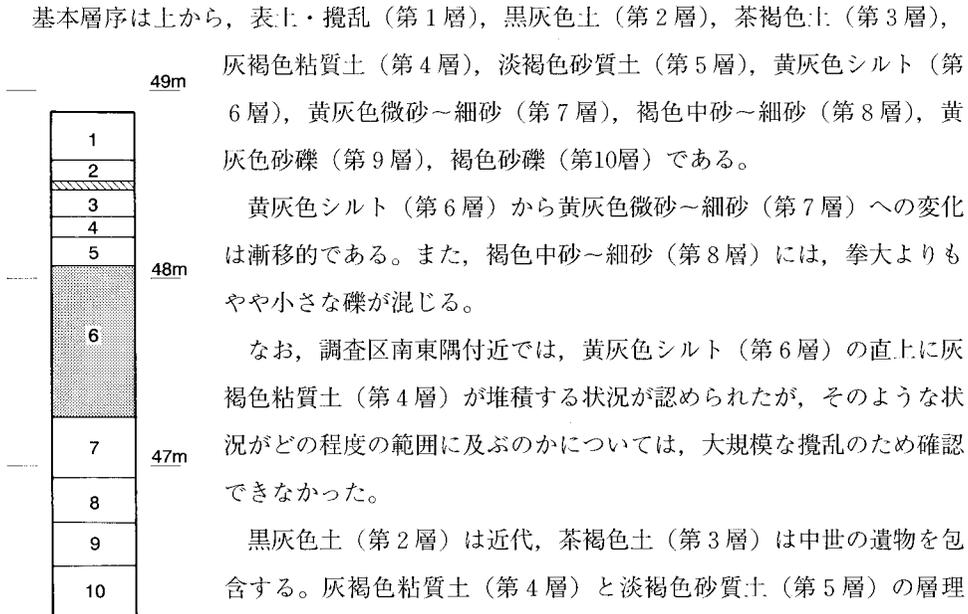
調査地点一帯は現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には高野川系旧流路、白川系旧流路が流入する低地であった。古代末には六勝寺を中心に展開した白河街区の北辺をなし、康和5（1103）年に僧増誉が創始した聖護院とその鎮守社である熊野社の所領に含まれていた。室町時代には聖護院村が成立し、近世後半には蔬菜類を主産品とする近郊農村として栄えた場所である。周辺の既往の調査では、縄文時代から江戸時代に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。なかでも、古代から近世に至る各時期の井戸（34・141・154・155・191・239・240地点）、近世の大規模な土取穴（154・155・240地点）、幕末の歌人大田垣蓮月の手になる蓮月焼を多量に出土した土坑（141・239地点）は、この周辺に特徴的な遺構であり、今回の調査でもこれらの存在に留意しつつ、縄文時代から現在に至る土地利用の変遷に関する資料を得ることを目的とした。

発掘調査の結果、旧帝国医科大学に関わるものと考えられる煉瓦造建物基礎などに少なからず破壊されていたが、中世の井戸、集石土坑（図版2-2・3）、柱穴などを検出した。出土遺物は、整理箱にして6箱を数える。その帰属時期は縄文時代から近代にまで及ぶが、中世のものが主体を占める。中世の遺物のほとんどは土師器や瓦器などの小片であるが、井戸から完形の土師器皿が数点出土したほか、集石土坑から瓦器羽釜の破片が比較的多く出土した。古銭も数点出土している。

なお、現地調査は千葉豊と阪口英毅が担当し、曾根茂の助力を得た。また、出土遺物の整理作業は阪口が担当し、下坂澄子・本吉恵理子・曾根茂・長尾玲・坂田千尋の助力を得た。出土遺物の写真撮影は千葉が担当した。

## 2 層 位

発掘調査前の地表面はコンクリートによって固められており、ほぼ水平面をなしていた。標高は48.9mを測る。調査面積が7 m×7 mと狭小であったこと、煉瓦造建物基礎や既設管などによる大規模な攪乱が調査区の壁の四周に及んでいたことから、層位を良好に観察することのできる壁面がきわめて狭い範囲に限られた。そのため、ここでは2ヶ所での観察を基にして、模式的に層位を示す(図1)。黄灰色シルト(第6層)よりも上層の堆積状況は調査区北西隅の壁面の観察に、黄灰色シルトよりも下層の状況は煉瓦造建物基礎の撤去にともなう立合調査においておこなった調査区西壁沿いの断ち割り壁面の観察に基づいており、図1では両者を合成して示した。



- 1 表土・攪乱
- 2 黒灰色土
- 3 茶褐色土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 淡褐色砂質土
- 6 黄灰色シルト
- 7 黄灰色微砂～細砂
- 8 褐色中砂～細砂
- 9 黄灰色砂礫
- 10 褐色砂礫

図1 層位模式図  
縮尺1/40

基本層序は上から、表土・攪乱(第1層)、黒灰色土(第2層)、茶褐色土(第3層)、灰褐色粘質土(第4層)、淡褐色砂質土(第5層)、黄灰色シルト(第6層)、黄灰色微砂～細砂(第7層)、褐色中砂～細砂(第8層)、黄灰色砂礫(第9層)、褐色砂礫(第10層)である。

黄灰色シルト(第6層)から黄灰色微砂～細砂(第7層)への変化は漸移的である。また、褐色中砂～細砂(第8層)には、拳大よりもやや小さな礫が混じる。

なお、調査区南東隅付近では、黄灰色シルト(第6層)の直上に灰褐色粘質土(第4層)が堆積する状況が認められたが、そのような状況がどの程度の範囲に及ぶのかについては、大規模な攪乱のため確認できなかった。

黒灰色土(第2層)は近代、茶褐色土(第3層)は中世の遺物を包含する。灰褐色粘質土(第4層)と淡褐色砂質土(第5層)の層理面、および灰褐色粘質土(第4層)と黄灰色シルト(第6層)の層理面では、縄文土器の破片が出土した。黄灰色シルト(第6層)よりも下層では、遺物を確認できなかった。

なお、調査区北西隅でのみ、黒灰色土(第2層)と茶褐色土(第3層)の間に、淡褐色土が確認された。強く固結していること、厚さ5 cm程度で一定していることから、近世から近代にかけてのある時期に機能していた路面であった可能性が考えられる。

### 3 遺構と遺物

#### (1) 遺構 (図版2, 図2)

調査区内を分断するL字形の煉瓦造建物基礎や、それにとまなうと考えられる埋設管などによって、遺跡は大きく破壊されていたが、中世の井戸、集石土坑、柱穴などを検出した。柱穴には礎石をとまなうものもある。

SE1は円形の掘形をもつ井戸である。石組や木枠などの痕跡がまったく認められなかったため、発掘当初は土取穴の可能性を強く考えていたが、地表面から2.7m下で水溜の曲物を検出したことにより、褐色砂礫層（第10層）まで掘り抜いた素掘の井戸であることが判明した。曲物は径45cm、残存高42cmを測る。井戸底の標高は46.2mである。出土遺物から、13世紀から14世紀にかけてのものとみられる。

SK1は不定形に広がる集石である（図版2-2）。土坑の存在に留意したが、掘形は認められなかった。石は人頭大のものから拳大のものまで大小さまざまあり、密集度はそれほど高くない。その性格は不明である。出土遺物から、14世紀頃のものと思われる。

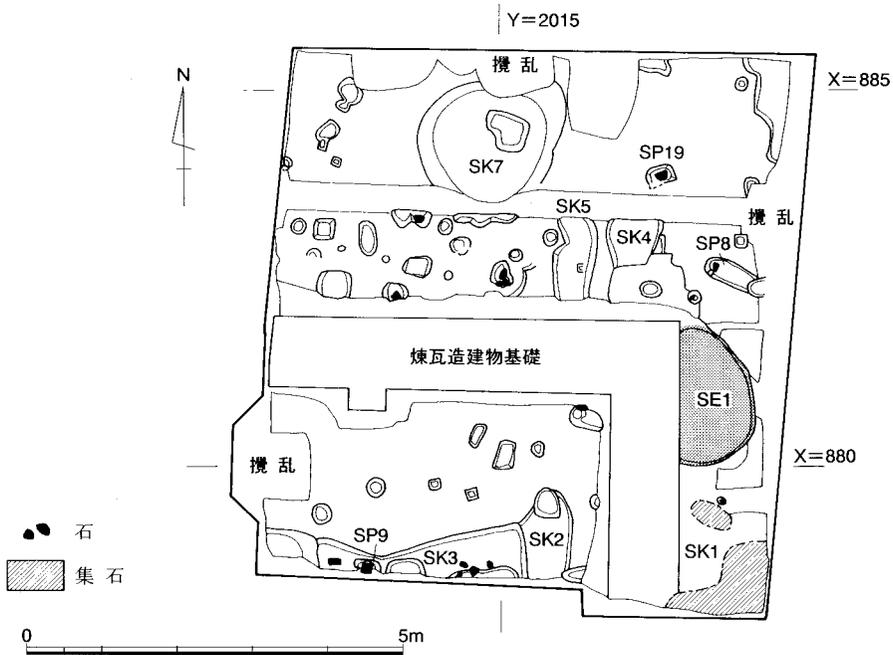


図2 中世の遺構 縮尺1/100

SK7は楕円形の掘形をもつ集石土坑である(図版2-3)。南北方向を長軸とし、検出面での長軸2.2m、短軸1.7mを測る。SK1に比べて石が小ぶりで、かつ大きさがそろっており、一定の標高に分布する傾向がある。やはり性格はよくわからない。出土遺物から、14世紀頃のものと思われる。

SP9・SP19は長方形のピットであるが、平らな石を据えてあったことから、根石をもつ柱穴であると考えられる。石が出土したピットはほかにも存在したが、根石と判断する状況を示すものはこの2ヶ所のみであった。

(2) 遺物(図版3、図3~6、表1)

**縄文・弥生時代の遺物** I1は調査区南東隅付近において、灰褐色粘質土(第4層)と黄灰色シルト(第6層)の層理面で出土した縄文時代晩期後葉の突帯文土器である(図3)。同一個体と思われる破片9点がまとまって出土したが、接合はしなかった。そのうち、刻目をつけた突帯がつく頸胴部の破片2点を図示した。刻みの形状はO字形である。下から上の方向にケズリを施している。病院構内では、191地点でも同様の資料が出土している〔千葉1991 p.38〕。

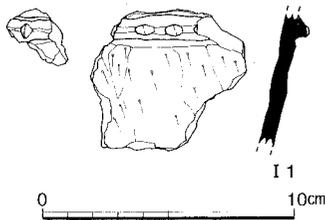
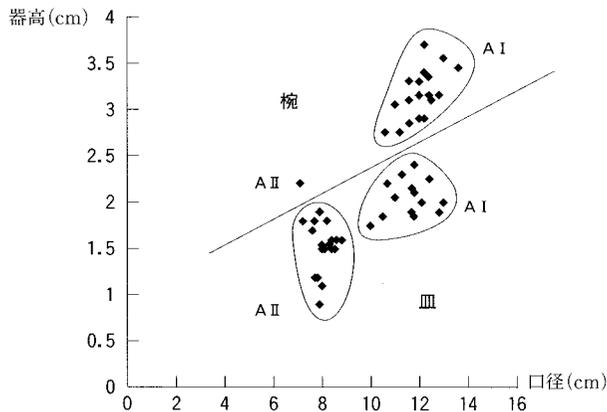


図3 縄文時代の土器 縮尺1/3

灰褐色粘質土(第4層)と淡褐色砂質土(第5層)の層理面でも縄文土器の破片3点が出土したが、いずれもきわめて小さな破片であるため、詳細はよくわからない。

また、SP18から弥生土器の破片1点が出土したが、やはり小片であるため詳細は不明である。

表1 SE1出土土師器の法量分布



**中世の遺物** I2~I75

はSE1出土遺物である(図4・5)。

I2~I42は土師器皿である。口径と器高の比率によって、皿と椀に分類でき、さらに口径のまとまりによって、皿と椀をそれぞれA I, A IIの2群に分類できる(表1)。I2~I21は皿A I。

遺構と遺物

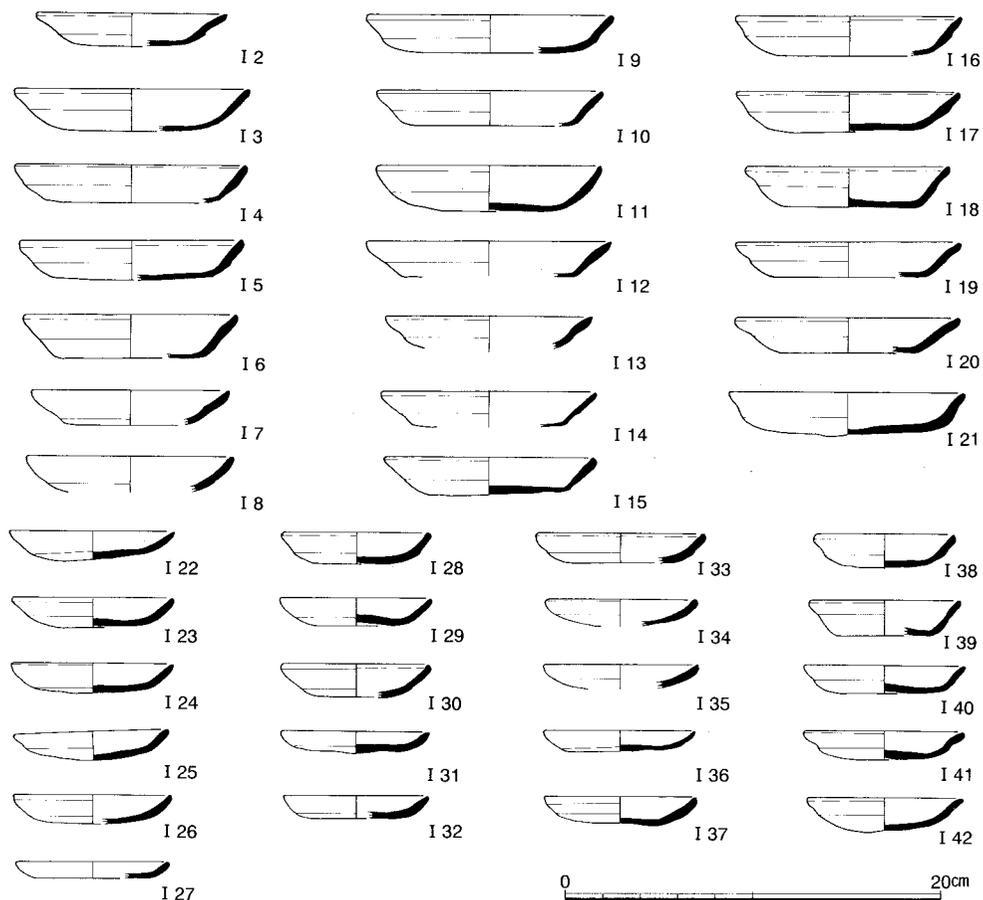


図4 SE1出土遺物(1) (I 2～I 42土師器)

口縁形態は、I 2が1段撫で素縁手法D<sub>1</sub>類、I 3～I 7が1段撫で素縁手法D<sub>2</sub>類、I 8が1段撫で素縁手法D<sub>3</sub>類、I 9・I 10が1段撫で面取り手法D<sub>4</sub>類、I 11が1段撫で面取り手法D<sub>5</sub>類、I 12～I 15が1段撫で素縁手法E<sub>1</sub>類、I 16～I 18が1段撫で素縁手法E<sub>2</sub>類、I 19・I 20が1段撫で素縁手法E<sub>3</sub>類である。I 21は全体に厚ぼったい作りで、少なくとも京都大学構内遺跡ではあまりみられない形態を呈することから、京都産ではない可能性も考えられる。I 22～I 42は皿AⅡ。口縁形態は、I 22～I 32がD<sub>2</sub>類、I 33～I 36がD<sub>3</sub>類、I 37・I 38がD<sub>4</sub>類、I 39がE<sub>1</sub>類、I 40～I 42がE<sub>3</sub>類である。

I 43～I 67は土師器椀である。I 43～I 66は椀AⅠ。口縁形態は、I 43～I 59がD<sub>2</sub>類、I 60・I 61がD<sub>3</sub>類、I 62～I 64がD<sub>4</sub>類、I 65・I 66がD<sub>5</sub>類というように、D<sub>3</sub>類が主

体を占める。I 67は椀 AⅡで、口縁形態は D<sub>1</sub>類である。

土師器皿は I 36が灰白色を呈するのを唯一の例外として赤褐色を呈し、土師器椀はすべて灰白色を呈する。土師器の皿と椀における、このような明瞭な色調の相違は、近接する 239地点でみられた傾向に一致する。

I 68～I 70は瓦器である。I 68は鍋。外面は指押さえ、内面は刷毛目調整で仕上げる。底部から胴部下半にかけて有機物の付着が顕著である。I 69は皿。見込みにジグザグ状の暗文が施される。I 70は椀。体部内面に螺旋状暗文が施される。形骸化した低い高台を貼り付けている。

I 71は瀬戸系の短頸壺。あるいは水注かもしれない。頸部が明瞭に屈曲し、口縁部は外側へ向けて立ち上がる。I 72は黄釉陶器盤。図示はできなかったが、底部の破片も存在する。口径22cmに復元できる。口縁部は玉縁状をなし、体部はややふくらむ。内面に黄褐色の釉をかける。鉄絵はみられない。胎土は砂粒を多く含む。出土することは稀であるが、京都大学構内では本部構内の181地点や医学部構内の207地点などで類品が出土している〔五十川ほか1992 p.15, 五十川ほか1995 p.50〕。I 73は常滑甕。断面N字状の口縁形態をもつ。口縁部内面に粘土紐の積み上げ痕が認められる。I 74は龍泉窯系の青磁椀。体部を蓮弁様に成形する。I 75は黒釉陶器。頂部に径1.4cmに復元できる孔をもつが、本来の器形はよくわからない。外面および孔の端面に黒釉を施す。

I 76～I 81は SK1 出土遺物である (図6)。

I 76～I 78は土師器皿である。口縁形態は、I 76が E<sub>1</sub>類、I 77・I 78はいずれも E<sub>3</sub>類。I 79は東播系須恵器のすり鉢。口縁端部は上下へ肥厚し、玉縁状を呈する。外面の口縁部下には2条の段がめぐる。I 80は瓦器鍋。外面を指押さえ、内面を撫でで仕上げる。胴部下半に煤が付着する。I 81は信楽のすり鉢。内面に3条1単位のすり目をもつ。木戸雅寿の分類による B3 類である〔木戸1995 p.405〕。

I 82・I 83は SK2 出土遺物である (図6)。いずれも土師器皿で、口縁形態は E<sub>4</sub>類。

I 84～I 89は SK3 出土遺物である (図6)。

I 84～I 88は土師器皿である。口縁形態は I 84が D<sub>1</sub>類、I 85～I 88は E<sub>1</sub>類である。I 89は瓦器の火鉢。口縁付近に2条の突帯を貼り付け、その間をスタンプ文で充填している。

I 90・I 91は SK4 出土遺物である (図6)。

I 90は土師器皿。口縁形態は E<sub>1</sub>類である。I 91は古瀬戸の皿。高台に輪形の焼き台が

遺構と遺物

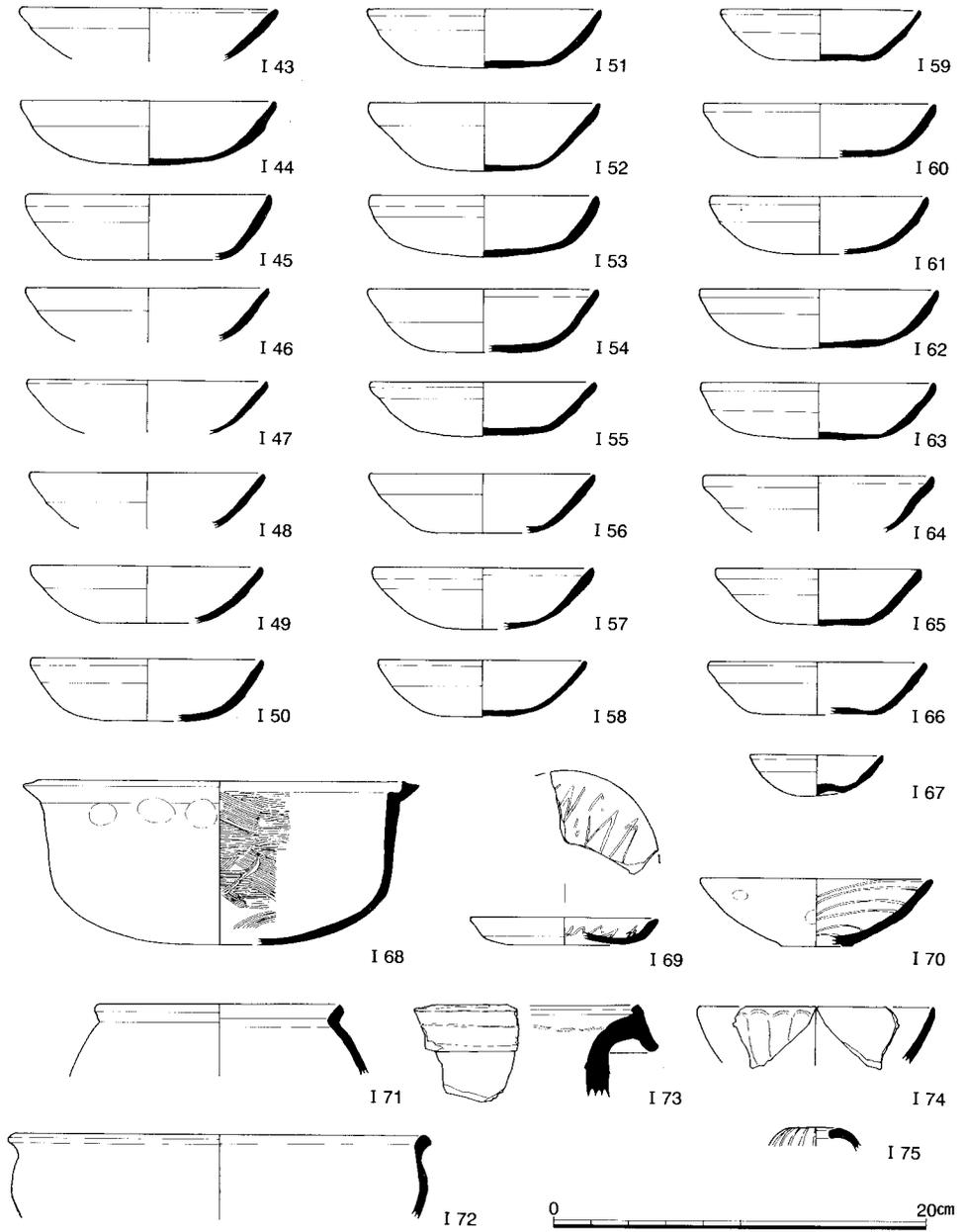


図5 SE1 出土遺物(2) (I 43~I 67土師器, I 68~I 70瓦器, I 71瀬戸, I 72黄釉, I 73常滑, I 74青磁, I 75黒釉)

京都大学病院構内 AF20 区の発掘調査

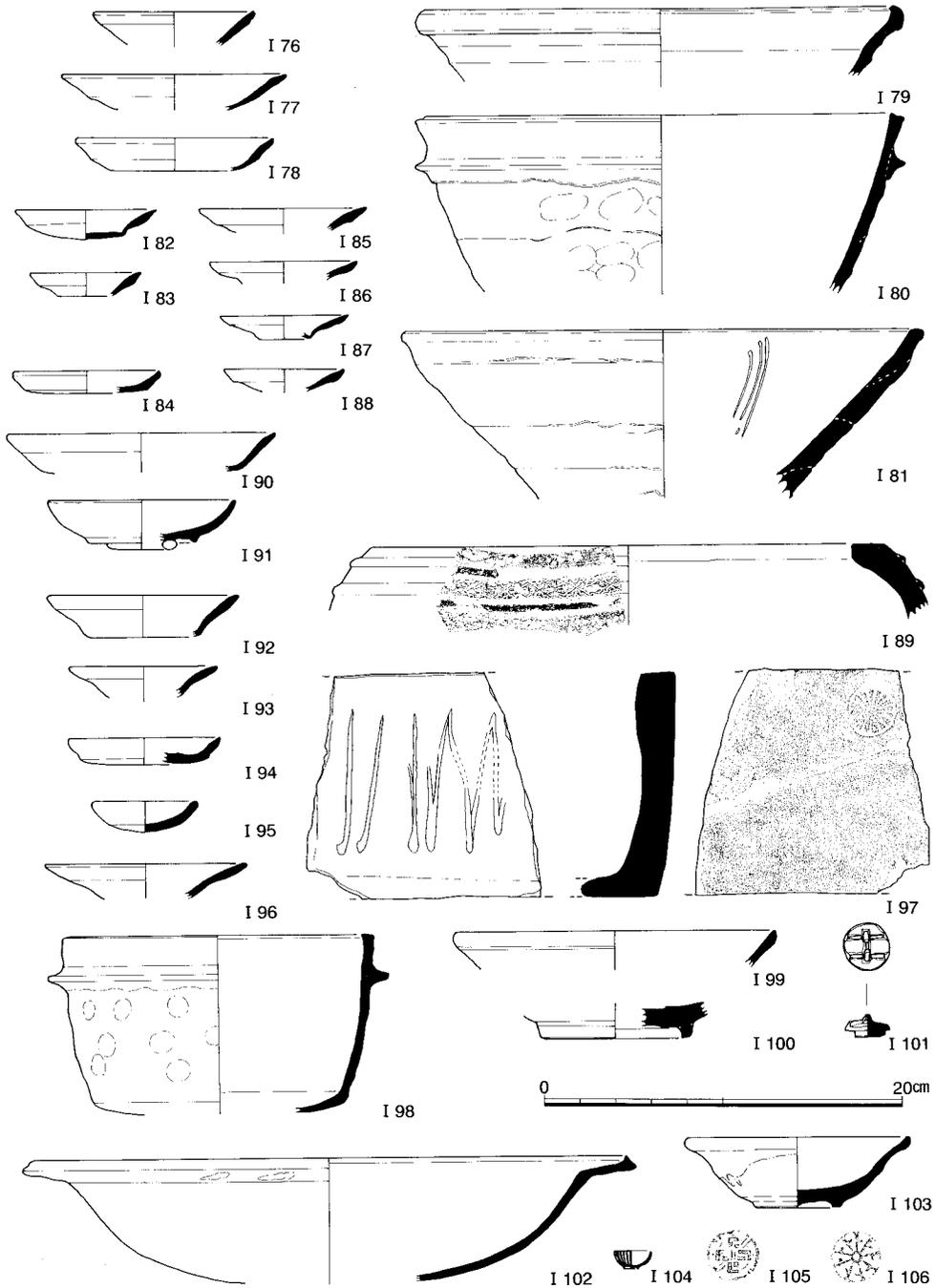


図 6 SK1 出土遺物 (I 76~I 78土師器, I 79須恵器, I 80瓦器, I 81信楽), SK2 出土遺物 (I 82・I 83土師器), SK3 出土遺物 (I 84~I 88土師器, I 89瓦器), SK4 出土遺物 (I 90土師器, I 91古瀬戸), SK5 出土遺物 (I 92・I 93土師器), SK7 出土遺物 (I 94~I 96土師器, I 97・I 98瓦器, I 99白磁, I 100青磁), SP8 出土遺物 (I 101土製品), 撿乱出土遺物 (I 102瓦器, I 103唐津, I 104磁器, I 105・I 106土製品)

## 小 結

溶着している。

I 92・I 93は SK5 出土遺物である(図 6)。いずれも土師器皿で、口縁形態は E<sub>1</sub>類。

I 94～I 100は SK7 出土遺物である(図 6)。

I 94～I 96は土師器皿である。口縁形態は、I 94・I 95が D<sub>2</sub>類、I 96は E<sub>3</sub>類。I 97・I 98は瓦器である。I 97はいわゆる奈良火鉢。口縁部付近の外面に16弁の菊花のスタンプを押している。内面にはジグザグ状の暗文を施す。器壁は厚く、底部から口縁部まで、ほぼ直立する。立石堅志による分類の浅鉢 I である〔立石1995 p.439〕。I 98は羽釜。外面は指押さえて仕上げ、内面には刷毛目調整の痕跡をわずかに確認できる。I 99は白磁碗の口縁部で、弱い玉縁をもつ。I 100は青磁碗の底部。高台の内側を露胎とするほか、見込み中央を径5.4cmにわたって正円形に露胎としている。

**近世の遺物**(図 6) I 101は SP8 出土遺物で、釜の蓋形のミニチュア土製品。下半の柄状部は別づくりの部材を貼り付けたものである。上半の蓋形部にのみ施釉している。

I 102～I 106は攪乱出土遺物である。

I 102は土師器煮炊具で、いわゆる土鍋。口径33cm、高さ7cm前後に復元できる。半球形の体部に、外へ大きく開いた口縁部がつく形態をとる。口縁端部は上方やや内向きに突出させる。内外面ともに丁寧に撫でて仕上げているが、口縁部外面には刷毛目調整の痕跡が残る。また、体部から口縁部への屈曲部外面に、棒状工具によるものと考えられる痕跡が観察される。口縁部から体部上半へかけての外面には、うっすらと煤が付着する。I 103は唐津の碗。口縁部を肥厚させ、高台は削り出している。くすんだ茶色を呈する素地の内面と口縁部外面に、灰色の釉を施す。見込みには4個の日跡が残る。I 104は磁器。紅猪口で、内面と口縁端部に透明釉を施す。I 105・I 106は泥めんこ。いずれも厚さ0.8cmを測る。また、図示していないが、攪乱から寛永通宝1枚が出土している。

## 4 小 結

今回の調査は調査面積が狭かったこともあり、そのみで注目を集めるような、とくに目新しい成果は得られなかった。しかしながら、周辺の既往の調査成果に照らし合わせると、従来の知見を補強するデータが得られたことを指摘できる。

**黄灰色シルトの確認** 本調査地点では、黄灰色シルト(第6層)が良好に遺存していた。このシルトは、高野川系旧流路によって生成された凹地が滞水域となって堆積したもので、医学部構内から病院構内にかけて広く分布すると考えられている〔清水1991 pp.

24-25]。近世に大規模な土取りの対象とされたために、病院構内においては失われている場合が多い。今回の調査では比較的良好な堆積状況を確認できたため、調査地点周辺の基本層序に関する基礎データを追加することができた。

**突帯文土器の状況** また、この黄灰色シルト（第6層）と灰褐色粘質土（第4層）の層理面において、縄文時代晩期後葉の突帯文土器が出土したことは注目される。病院構内遺跡では、縄文土器の出土状況に二つのあり方が認められる。第一は高野川系、白川系の旧流路にあたる砂礫中から出土する場合（141・155・239地点）で、これらは吉田山西麓から岡崎にかけての微高地上に存在した縄文集落からの流れ込みと解釈されている。第二は旧流路の肩部にあたると思われる部分から原位置を保って出土する場合（191地点）で、先史時代には旧流路が流入する低地部であった病院構内においても、自然堤防上や微高地上に縄文人の活動が及んでいたことを示すものと指摘されている〔千葉1991 pp. 29-30〕。

既往の調査において、後者の出土状況を示して出土したのは縄文時代後期の土器のみである。今回の調査で晩期後葉の突帯文土器が後者に該当する出土状況を示して出土したことによって、この地で縄文人が活動していた時間幅が、従来認識されていたよりも広くなる可能性が示唆された。ただし、ごく少量の出土に過ぎないため、今後の周辺地域の調査を通して検証に努めていく必要がある。

本調査地点では、おもに上記の二つの点について、土地利用の変遷を探る手がかりとなる、貴重なデータを蓄積することができた。